



108号  
2005/11/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

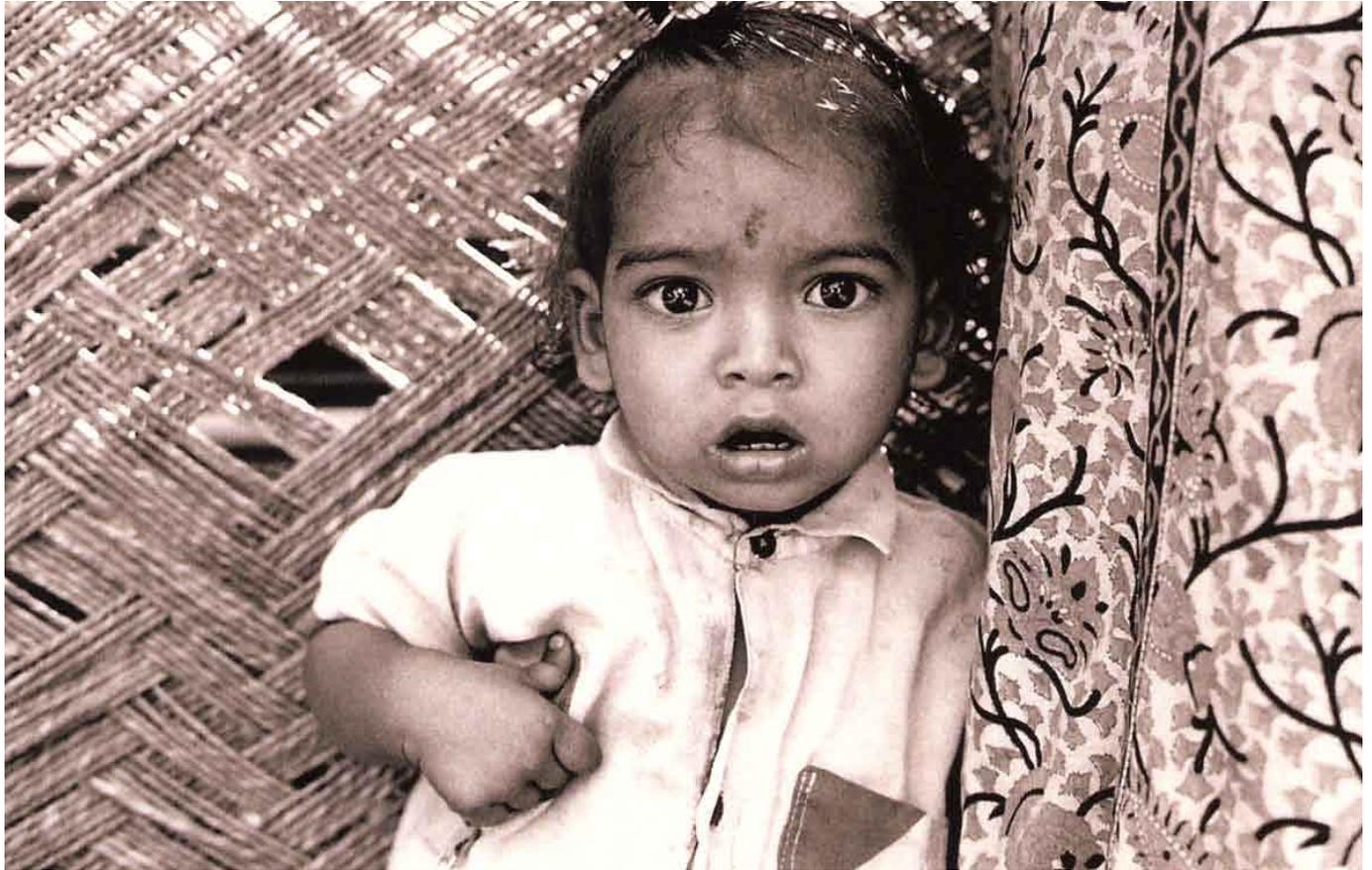
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://users.hoops.ne.jp/wanli-jp/>

Eメール:[wanli@m2.ocv.ne.jp](mailto:wanli@m2.ocv.ne.jp)

ホームページは毎月5日頃までに更新を務めています。



◆撮影地：インド ◆撮影：大久保聡 ◆写真展「世界を知ろう！我々は皆、地球人」展示写真

【お出掛けください】

## 第8回 町田発国際ボランティア祭

### 2005 夢広場

<http://www.yumehiroba.jp>

2005年11月6日(日) 10:00 ~ 16:00

於：町の駅「ぽっぽ町田」 参加：無料

JR横浜線ルミネ側改札口徒歩3分 / 小田急線町田駅南口徒歩5分  
町田東急デパート裏109ファッションビル裏通り(地図最終ページ)

### 夢広場祭写真展

「世界を知ろう！ -我々は皆、<sup>ちきゅうびと</sup>地球人-

11月1日～5日 11:00～18:00 最終日：16:00

於：町田市立街角ギャラリー(町田市原町田4-6-8)

会期中3日と5日(13:30～15:00)下記の講演があります

●11月3日(祝)「スリランカの津波被災地を訪ねて」  
為我井輝忠氏(日本スリランカ文化交流協会会長)

●11月5日(土)「フィールドで学ぶ国際協力(インドネシア)」  
バンバンルディアント氏(和光大学助教授)

主催：2005 夢広場実行委員会

共催：財団法人町田市文化・国際交流財団

問合せ：042-722-4260 2005 夢広場実行委員会・町田国際交流センター

\*地図と6日の舞台の出し物を12pの案内板に掲載しました。

### ‘わんりい’ 108号の主な目次

中国紹介④〈中国民俗 — 改革解放後の変化4〉……………2
黄土高原来信第二部「陝北女娃娃」 栄栄 ……………4
北京からこんにちわ ……………6
ピースボート105日間の旅Ⅷ「モンテゴベイ」……………7
ラオスの山からだよりⅥ ……………8
中国を読む⑦【僕が見た『大日本帝国』】……………9
「あなたの知らないアフリカ」②(講演会より)……………10
松本杏花さんの俳句……………12
「中国語で歌おう」11月の案内 ……………12
媛媛来信 ⑨ 辮髪の話 ……………12
‘わんりい’掲示板 ……………13

「世界を知ろう！ -我々は皆、<sup>ちきゅうびと</sup>地球人-

では、プロとして活躍の、大久保聡氏の写真、夢広場参加団体より出品の各国々の写真が併せて100枚を越えて展示予定です。又、黄土高原来信第二部「陝北女娃娃」の著者・周路先生の、歳月を感じさせる黄土高原の人々の写真5点が展示されます。是非、お立ち寄り頂ければと存じます。

## ◆家

**旧：**初回から現地人の家を訪問する機会に恵まれている。ここ15年の間にかなり変わってきているのをずっと感じてきた。以前は住居といえば、都市では「宿舎」という社宅。格安の家賃で勤務先から支給されていたそうで、それぞれ勤務地のすぐそばに住むのが普通だった。わたしの通勤時間を聞いて、1時間近くもかかるのは遠いね、とよく言われたものだ。勤務先のすぐそばに住んで、そこだけの世界に浸るのもどうかと思うが。

ところで、中国の住宅事情は日本と違って大変興味深い。まず高層階であってもエレベーターが以前はなかった。日本の場合は文句なしに高層階のほうが値段が高いが、中国の場合は上る不便も考慮して高層階は中層階よりも安かったりする。上るに適度な階が高いのだそうだ。階段には電気がついていて、各階ごとに手でスイッチを入れる。そして一定時間がたつと自動で切れる。日本のようにつっぱなしにはしない。だから夜間で階段の電気が故障している場合は大変だ。盲人同様の状態で、かつ杖なしで階段を上らなければならない。階段の一番上と一番下の場合がよくつまづく。不便だなと思うが、節電を考えると必要な方法だ。

階段をのぼってさて家のドアを開けようとすると、まず関門がある。「防盜門」という網状(形状は様々)の外門がついている家が多い。ドアの外にこの防盜門をつけることで、強盗を防ぐためらしい。防盜門を開けるとようやく通常のドアがあり、やっと家の中に入る。ちなみに、中国の家は各戸に表札を出さない。宿舎にはポストもない場合が多い。だから知っている人でなければ、誰がどこに住んでいるかはまったくわからない。防犯を考えればその通りだし、あえて日本のように構成人員まで表示する必要があるのかどうかは中国のこの方法を見て改めて疑問に思った。

家の中に入ると、日本とはつくりが違う。まず中国人は

靴を脱がない西洋式の生活をしていたが、最近は経済発展に伴い？、靴を脱いでスリッパ生活をしている家庭が多い。玄関という空間はないので、ドアのそばに靴とスリッパがおいてある。それにドアのすぐそばは、まずほとんど居間と台所だ。日本のように個人部屋が先にあって居間と台所が奥にあるつくりはない。以前は家庭にごみ箱がない場合が多く、生活ごみはドアの外などにあるダストシュートからそのまま1階に落とされていたりしたところもある。生ごみ系は、トイレの便器に流す。動植物などをそのまま買ってきて調理するのであれば、汁もしたたらないように台所は入口そばのほうが都合がよいと思う。同様に居間も来客時すぐに話せてかつ私的な空間を見せないためにも、入口近くのほうがよいと思う。

ドアの内側すぐに靴置き場とスリッパ置き場という明確な空間がないものの、都市では靴を脱ぐ生活も結構多かった。床にじゅうたんを敷いている場合もあるのでそういうときはスリッパだ。靴のままの場合、床は打ちっぱなしのコンクリートだ。食卓から出た小骨などの生ごみを床に落として、ほうきではくには便利だ。中国では子供の排泄物は汚くないらしく、股割れズボンの子が排泄してもモップで拭けばよいという考えもあり、そういう場合は靴のまま外と同じ感覚のほうがいい。

1DKの宿舎で家族三人が生活する場合、私的空間は大きめになっている。部屋の中央にダブルベッドがあり、壁際にたんすや棚があつたりする。冷蔵庫が私的な部屋にあり、台所がないのは建築当時(1950年代?)にはなかったからだろうか。台所と居間が同じ場合は、そこで話す。居間もない場合は、来客時寝室で話をする。ソファがある場合もあるし、椅子だけのときもある。テレビは寝室にある。

日本と違って大変興味深いのは、寝室などに夫婦の結婚写真が必ずといっていいほど置いてあること。日本人はわざわざ式以外でメイクアップするために撮影しに行く

習慣はあまりないと思うが、中国や韓国など外国では式でない日に場所を選んで写真撮影することが多いようだ。ポーズも決めていて笑えるが、自信のある顔が多くて、国民性を感じてしまう。逆に日本人は恥ずかしがりなのだろう。壁面にポスターや写真を貼っていることもある。それから中国の部屋の天井はとても高い。日本の場合2.5メートルが多いようだが、あちらは3メートルはあるかもしれない。壁も厚いようで、大声を出しても聞こえない。このため、部屋に一步入ると静寂さが漂い、外の喧騒を忘れる。日本滞在の中国人について、よく大声で話すのが気になるというが、あれは彼らの国民性と同時に居



大連の高層マンション。山をバックに海のそばなので環境は抜群。海側の部屋はすばらしい眺望だろう。

住空間においても隣家を気にしなくてよいくらい防音されているからか?と思う。

いつも感じるのだが、大陸特に北方の気候は日本に比べてどんよりしていることが多い。早朝もからっと晴れず何となく曇っている。そして昼頃になると猛烈な暑さに襲われ、夜になると急に涼しくなる。要は寒暖の差が激しいということ。中国人は日中窓を開けっ放しにしている。窓といっても、日本ほど大きいわけではない。換気を考えていない部屋のつくりが多いが、窓を開けないと室内がじめじめする。南面を中心に作られているわけでもないのに、北側の部屋は風通しも弱い気がした。日本人は光や換気を気にする民族なのだろう。

さて部屋の備品だが、冷蔵庫の置き場所も面白いが洗濯機も微妙だ。これも後からできた電気製品で「旧三種の神器」だが、台所の場合もあり、廊下の場合もあり、置き場は難しかったようだ。

そんな社宅も90年代に入ってから、開放?が進み個人で買い上げるようになっていったそう。経済的に裕福な人は、お手伝いを雇い空き部屋に住ませたりする一方、そうでもない人は他人と水まわりを共有したりしたようだ。とにかく、外のドアの内側に入っても、各部屋に鍵がついている。外のドアの鍵が複数ある家もあった。男性がよくズボンから鍵束をぶら下げているが、それぞれ必要な鍵だと思う。がちゃがちゃと何度も開けて、ようやく自分のベッドにたどり着くというわけだ。

**新:** 最近是不動産関係がすごいらしい。大都市では次々に平屋を壊して高層マンションを建設している。大規模な開発は90年代後半で一段落したと思うが、設備のよい高級マンションはまだまだ建設ラッシュだ。しばらく行かないと、景観がすっかり変わっていて驚くことが多い。

東京では三人家族で100平方メートルの家に住んでいるといえば、金持ちか?と思うが、中国ではそんな広さのマンションが次々に作られている。雑誌や新聞にはそういったマンションの広告が頻繁にのって、見て驚いた。



廈門島南部にある高層マンション。海のそばなので高層階は強風かもしれないが景色は相当良いだろう。一度でいいから景色を眺めてみたい。

兎小屋とは、日本の住宅事情だと実感した。室内図も出ているが、やはり基本的にドアの内側は居間で、台所がそばにある。個室はその奥に配置されている。日本と際立って違うのは、100平米くらいであれば、トイレシャワーが2箇所にあるということだ。主寝室となる部屋の内部に一つ、その他家族や客用に共用で一つ。日本のつくりでは主寝室に設置するという例はあまりないが、外国では珍しくもないだろう。トイレとシャワーが同じ部屋というのは西洋式だが、当然のように二つ設置しているというのに驚いた。分譲マンションにも何度か行って見たが、社宅よりも設備はよく部屋も清潔になっている。エレベーターについては低層階にはないこともあるが、全階についていることもある。エアコンがついているところも多いが、基本的には窓をよく開けている。

室内調度品で驚くのは、立派なソファーやテーブル、大型テレビ、豪華な照明やカーテン、ダブルベッド、大きな写真(または絵)などだ。室内そのものが日本より広いだけに、調度品も立派なものが多い。中国人宅訪問がとても好きだが、毎度びっくりさせられる。中国では部屋の内装を個別にやるので、マンション本体と同じくらい費用がかかる場合もあるそうだ。そのあたりが個性の見せ所だろう。今ではCDやVCD、DVDなどオーディオ機器もそろっているし、パソコンや家庭電話は、大都市では相当普及しているらしい。携帯電話も当たり前で、カメラ付きも結構見かける。観光地に行けばデジカメ派が多数を占めるようになってきて、PC・携帯・デジカメなしでは肩身が狭い。携帯電話の普及で、日本と同じような電話カードはもうなくなってしまったし、公衆電話もICカードのみだがこちらを使う人はあまり見かけない。どんな田舎でも設置してあるのに、もったいなく思う。

ちなみに、分譲マンションは日本以上にセキュリティ重視だ。マンション自体が壁で囲まれ、入口には常時警備員がおり往来者をチェックしている。鍵がなければ大門すら入れない。そのかわりに内部は別世界のようになっていて、外界との隔絶を感じる。これは社宅の「宿舍」も同様で警備

についてはきびしいところが多い。ベランダすらすべて“防盜網”で覆われ、まるで籠の鳥状態だがそれだけ治安にも敏感なのだろう。サンルームも多く、住人は外観を気にすることなく個別の世界を楽しんでいるように思える。日本のように外観重視で、洗濯物すら見えるところに干せない住宅事情とは異なり、個性の乱舞だ。

成功した彼らの大邸宅を見ると悲しくなってしまうが、中国の進化のすさまじさにも驚くばかりだ。お金があれば、廈門島の南部の海の見える高層階のマンションがほしいなあ。

黄河が、延川県を40余里にわたって流れる途中に名の知れた大峽谷・乾坤湾があり、ここ何年間、この乾坤湾を県の観光資源の目玉にしようと開発されてきています。小程村は乾坤湾に近く最も多く利益を得る村です。乾坤湾に来る観光客は殆どこの村で足を休め、喉の渇きを癒し、簡単な食事を取っています。

ある日、陝西テレビ局の一行が乾坤湾の雄姿を撮影しにやって来ました。彼らはいろいろ準備を整えて来ましたが、上空から乾坤大湾を俯瞰した撮影もしたいと熱気球を

運び込んでいました。その年、私は延川県の文化局で副局長の職にあり、当然彼らに同行して出かけました。

車の列が、がたがた路に揺られ、やっと乾坤湾に着いたときはもう正午で、太陽は頭の上にあります。撮影には向きません。で、皆、午後3時ごろまでゆっくり休んでから、色どり鮮やかな熱気球を広げ、液化燃料に点火して風の向きなどを調べていました。大きな彩球が籠をぶら下げ、ぶら下がった籠には撮影技師が座って、彩球はゆっくりと空に上がり始めました…と、まさにこの時、西の山梁に黄色い土を吹き上げて突風が巻き上るのが見えました。村人が「竜巻だ」といい、もう続けることはできません。皆で心と力を合わせ、迅速に既に高く上がった気球を引きおろしました。心を逸(はや)らせていた撮影技師は顔面蒼白となり、同僚に向かって何度もお礼を言い続けました。

突風の後は大雨になり、撮影隊は付近の小程村に撤退せざるを得ず、時機を待つことにしました。しかし、天気は一向に良くなり、雨は断続して三日間降り続き、一筋の陽光さえ射さないという状態で、撮影隊員一同は一日中、家主のオンドルの上でトランプをして時間を過ごすしかありませんでした。

私はすぐ家主の長女である荣荣と仲良しになりました。壁に張り付けてある賞状から、荣荣は、正式名は郝雪荣といい、毎年の試験では学年の前の方の何人かに入り、この度の学年末の試験ではなんと一番でした。しかし、彼女の父親は愁眉を開きません。荣荣の中国入試験で3点足りず、県市の中学には入れないのです。もしもっと遠い永坪中学校に行くことになれば、越境入学費として千元以上を更に支払わなければなりません。家は余裕がありませんから、荣荣は学校を止めざるを得



2005年8月 16歳になった荣荣は妹たちと弟の小さいお母さん

ないでしょう。

この家に三日泊まり、30過ぎの家主は何と5人もの子どもがいるということが分かりました。荣荣は長子で、下に女の子が三人続き、末の5番目だけがやっと男の子で、家中が朝から晩まで彼を囲むように過ごしています。特に荣荣はまるで母親の責任を肩にしているようで、毎日、男の子を背負い、食事は先に自分で噛み砕き、口から口へ移して男の子に食べさせ、私は親鷹が雛鷹に餌を与えている情景を思い浮かべました。荣荣の家は村で唯一の店を開いており、

毎日、村人が来ては糸とか針とかこまごましたものや日用雑貨を買いに来ますが、それも荣荣が全部親に代わって売っています。貧しい家の子どもは早くから家のことをするようになるのですね。

三日が過ぎ、十何人かの男どもが家主の蓄えた食糧をきれいさっぱり食べつくして、天気はやや好転しました。乾坤湾を空から撮影しようと言うものもおらず、矢も楯もたまらないという様子で県市に戻ってゆきました。

その後、(延川市に戻って)何日か経って或る晩、友人たちが集まり気持ちよく飲んで、さて自分の家に帰ろうとしたところへ、小程村の家主が荣荣を連れてやってきました。彼らもまだ食事をしていない様子なので、すぐレストランに引き返し、余りものの煎餅、麺類とまだ開封していない飲み物を与えお腹をこしらえさせました。どうしても彼女を進学させられないというので、明日にでも県の主管(教育関係の)をお願いしてみましょと伝えました。翌日、主管に話しますと、積極的に関係方面に頼んでくれたのですが、父娘は既に小程村に帰ってしまっていました。何日か後、戸の隙間にメモが挟まれているのを見つけ、開いてみますとそれは荣荣が残したものでした。メモの内容に私の心は痛みました。

周小父さん、私は学校に行けません。

学校に行くのはとてもとても難しいです。

周小父さん、どうすればいいのですか？

周小父さん、私は小父さんの子どもになってもいいですか？

周小父さんは、本当に本当にいい人です！

どうかお体を大切に、何事も順調に行きますように。

では、時間がありませんので、これで書くのを止めます。

陕西省延川县土岗乡小程村 郝雪荣同学

この後、私は何度も小程村に行き、この親子を見かけました。がメモのことはどちらからも何も言いませんでした。この種の問題にどんな解決法も見つけ出せず、また、この親子を慰めるような話も思いつくことができません。このようなことはここでは当たり前で、何と応えてよいのか難しく、いずれにせよ、私という人間の力量では限界があるのです。

家の暮らし向きが貧しく、労働力を必要とされ、栄荣は毎日弟を負い、正式に“小妈妈”の重い責任を担うようになりました。彼女の“大きくなったら科学者になりたい”という夢ははかなく消えてしまいました。栄荣を見かけるたびに胸が痛

み、カメラを抱えていても(栄荣の)写真を写す気持ちになりません。細かなことをいうまでもなく、誰でも郝雪荣の今の様子や未来がどうであるかは想像に難しくはないでしょう。

(田井訳)

**周路**：1956年生。中国安徽省合肥市在住。

合肥市群集芸術館学芸員。

木版画家。

陝北の黄土高原に魅せられ、度重ねて赴き、2001年～2003年、陝北延川县文化局副局长に就任し現地に住む。木版画制作のかたわら民間美術研究及び撮影等にも勤しむ。著書に「陝北婆嫂剪纸」「延川风光」「画家眼中的黄土高原」「陝北纪实」他がある。

## 荣 荣

在黄河流经延川县四十余公里的路途中，有一段著名的大峡谷，这便是乾坤湾。这几年县里开发旅游，将乾坤湾作为重点，而毗邻乾坤湾的小程村则是最受益的自然村，大凡来乾坤湾观光的游客总要来此歇歇脚，喝口水，吃顿便饭。

一日，陕西电视台一行来此拍乾坤湾雄姿。他们是有备而来，还带来了热气球，准备高空俯拍乾坤大湾。那年我在县文化局挂职任副局长，理所当然陪同前往。

车队颠颠簸簸，好容易驶到乾坤湾，却是正午，太阳顶光，不便拍摄。大队人马便静候至下午三时许，才开始打开花花绿绿的热气球，点燃液化气，试试风向。硕大的彩球挂着吊篮，吊篮里端坐着摄像师，彩球开始缓缓升空……。正在此时，眼见西边山梁黄土飞扬，狂风卷起。老乡说这是“黑旋风”，不敢大意，大家便齐心协力，迅速将已升空的气球拽了下来。开始时雄心勃勃的摄影师这时脸色惨白，连声向大伙致谢。

狂风后便是大雨，人无回天之力。大队人马只好撤往附近的小程村，等待时机。然天公仍不作美，雨竟然断断续续下了三天，仍无一丝收敛迹象，急煞得一千人马坐立不安，整日窝在房东炕上打牌渡时。

我就认识了房东的大女儿荣荣。从墙上贴的奖状看，学名叫郝雪荣的荣荣每年考试都是年级前几名，这次期终考试还是第一名，可她父亲却愁眉不展，因荣荣考初中差三分，无法入县城中学。要不去更远的永坪中学就读还得交一千多元借读费。家中拮据，面临辍学。在这窑里住上三日，才发现三十来岁的房东竟有五个娃，荣荣是老大，下面到老四都是女娃，只有老五才是个男娃，一家人一天到晚围着他转，特别是荣荣，俨然担负起妈妈的责任，不但每日背着男娃，连喂食也要自己先嚼过后口对口吐给男娃吃，真使我想起老鹰哺雏鹰的那一刻。她家也是村里唯一的代销店，每日来买针头线脑，日用

杂货什么的，也全由荣荣打理。穷人的孩子早当家啊。

三天一过，十几条汉子也将房东家粮草耗个尽光，天稍好转，便迫不及待的往县城赶，再也不提高空拍摄乾坤湾的事了。

几日后的一个晚间，朋友聚会，喝得尽兴，返回住处时，发现小程村的房东带着荣荣也来到这儿，估计还没有吃饭，便立即返回餐厅，取来剩余的煎饼，面条和没开封的饮料给他们充饥，并答应第二天帮忙找找主管县长说说情，总不能叫娃不上学。翌日和主管县长说了此事，他倒愿帮忙和有关方面说情，但此后却找不到这对父女。几日后在门缝处见一字条，打开一看，是荣荣留的。字条内容让我即心酸又为难。全文如下：

周叔叔，我现不（能）上学，真是难上加难啊，

周叔叔，您说，这该怎么办呀！

周叔叔，我给你做个干女儿好吗？

周叔叔，您好，您真是个好人啊！

祝：身体健康 百事百顺

好了，时间有限，就此落笔。

陕西省延川县土岗乡小程村 郝雪荣同学

这以后我亦多次去过小程村，也见到了这父女俩！但对字条一事双方都没提起，我想不出什么办法来解决这类问题，也想不出什么话来安慰这对父女。这类是在此地太普遍，难以应对，我个人的力量毕竟太有限了。

家境贫困，家庭又需要劳力，荣荣现在每日负责带弟弟，正式担负起“小妈妈”的重任。她的“长大了想当一位科学家”的理想将永远成为泡影。由于内疚，以后每次遇见荣荣时，我都将相机收好，不愿记录这一时刻，其实不用细说，所有的人都可以想象得到，郝雪荣的近况与未来……

## ※ 大家好!

北京は、このところぐっと涼しくなり、昨日の雨は、日中でもちょっと寒く感じるほどでした。今日は、20年ほど前に小説「紅樓夢」の庭園をなぞって建てたといわれる大観園の近くまで行きました。

ここへ行くには、私の住んでいる紫竹園からは北京西駅で122路のバスに乗り変えます。ところが、北京西駅へ行く筈のバスは、公主墳までしか行かず、乗り換えたバスは二両連結のバスで、運転が乱暴で、立っていた私は、あっちへよろよろ、こっちへよろよろしていました。確かに、バスの前方の電光表示板に、「前方は、車と人が多いので、しっかりつかまっています」との文句が流れていましたが…。北京西駅は、公主墳駅からは、公主墳南と言う駅を挟んで、一駅なのですが、その一駅が、長いばかりでなく、とても混んでいて、なかなか進みません。そのうちに、バスのすぐ前で、乗用車同士の接触事故が起こって、バスがやっとすり抜けられるくらいしかあいていないところを、5センチ位ずつ進んでやっと切り抜けました。そんなこんなで、北京西駅に着いたのは、紫竹院をでてから1時間も経っていました。

北京西駅周辺は、とても混雑していました。122路の乗り場を聞くと、南口広場だと言われました。地下道を通って反対側の南口へ出てみると、北側とは打って変わって、のんびりとした雰囲気です。バスの停留所の標識はあるのですが、一箇所しかなく、122路はどこで待てばいいのか分かりませんでした。暫く眺めていると、だだっ広い広場に、いろいろな路線バスが入ってきて、周りの人たちが、乗り込むと発車していくことが分かりました。それで私も待っていると、やがて122路バスがやってきたので、慣れているような顔をして乗り込みました。

暫く広い道を走って、ロータリーで曲がると、二環沿いの道に入り、急に緑が多くなりました。そのうちに、二環を挟んで反対側に、柳の木が多い公園が見えてきました。これが大観園かと思ったのですが、そうではありませんでした。でも、ちょっと見たところ、紅樓夢の雰囲気を感じるような公園でした。やっと大観園の停留所について、二環の下をくぐって反対側へ行くと、水のたっぷりある水路があって、そのほとりに、緑があふれるような塀が連なっていました。これが大観園です。周りの雰囲気も、気のせいかもしれませんが、ちょっと時代が戻ったような感じがしました。もっとも、これは北京西駅の雑踏をくぐって来たせいで感じることもなのかも知れません

## ※ 大家好!

日本から来た友人夫妻を案内、と言うにはちょっとおこ

がましいのですが、一緒に行動して、面白いことがありました。

10月1日、2日、3日、地下鉄1号線の、天安門西と天安門東両駅は電車が止まりません。西単の次は、すぐ王府井です。10月1日に天安門広場に行った人から、90万人以上の方が広場に行って、前進もままならないような状態だったと聞きました。2日に、タクシーで王府井へ行ったら、途中渋滞にはまって、距離よりも待ち時間にお金を払ってしまいました。東西に走る道がどこも混んでいるので、南北に動く車も影響で動かなくなるのでした。あんな渋滞を経験したのは、本当に久しぶりでした。

10月2日は、午後3時半から、胡同ツアーを予定して、午前中は、五道口の方へ行きました。五道口から、軽軌に乗って東直門まで行き、タクシーに乗ろうと予定して、コーヒーショップの店員さんに、東直門までの所要時間を聞いたのですが、発音が悪くて、西直門までの時間を知らされ、安心してお茶を飲んでいました。さて、軽軌のホームに上がったのですが、そこで東直門までの駅の多さにびっくり、聞いた時間が違うと気がつきました。とても3時半に約束の場所にはいけそうもありません。取り合えずタクシーに乗って、旅行社に連絡をしたのですが、携帯が繋がりません。どきどきしているうちに、先方から電話が掛かってきて、やっと事情を話して、遅刻の了解は取り付け、この後も先方から連絡を貰う約束をしました。

その後、運転手さんの頑張りで、遅れると言った時間をかなり短縮して、約束の場所に着きましたが、それらしい人がいません。電話も繋がらないのでイライラ、うろろろしていると、三輪車が一台来て、「胡同ツアー？」と聞きます。「予約している」と言うと、「そうそう、迎えに来た」と言うのです。「ガイドさんはどこ？ 三人だから、1台ではだめでしょう」と言うと、地図を見せながら、「ガイドはここで待っている。今日は混んでいるので、3人で1台で行かなければならない」と言います。約束が違うので、ガイドさんと話がしたいと言っても電話を貸してくれません。彼が電話をして、ガイドが今来ると言うので、待っていると、私の携帯にさっきの人から電話がかかってきました。「もう着いている」と言うと、電話をしながら近づいてきました。結局、声を掛けてきたのは何の関係もない人で、だまして乗せようとしていたということが分かりました。危うくツアーの予定が台無しになるところでした。

観光客相手に、いろいろなだましのテクニックがあるとは聞いていましたが、わが身が、実際に体験するとは思いませんでした。だまされる人は、おかしいおかしいと思いつつながら、タイミングが悪いと、結果的に騙されてしまうのだと言うことがよく分かりました。

映画とワインパーティ(宴会)に明け暮れた10日間の大西洋から、カリブ海に入るとキューバが右舷に見え始めた。その翌日朝モンテゴベイに入港した。

ジャマイカといえばレゲエとボブ・マーリー。聞いたことはあってもほとんど何も知らない。俄勉強では間に合わないからもうあきらめた。モンテゴベイはキングストンに次ぐジャマイカ第2の都市。オプショナルツアーを申し込んでない6人で自由行動をすることになった。

ジャマイカにはグレートハウスと呼ばれる豪華な邸宅が各地に残っている。かつてジャマイカがイギリスの植民地だった時代、さとうきびプランテーションの所有者などの富豪は、はるかカリブの地に移住しながらも、故郷を懐かしんで、わざわざイギリスから家具を取り寄せ、ビクトリア様式の邸宅を建てた。そのひとつのローズ・ホール・グレートハウスに行くことにして、港からタクシー(ミニバン)に乗った。

市街を抜けて、50分ほどで到着。“魔女の館”とも呼ばれているこの邸宅、入場料@US \$15で現地ガイドがつく。この邸宅にまつわる話を聞いた。18歳でアイルランドから嫁いできたアニーは、3人の夫と使用人を次々と殺害する。最後は、自分も29歳で奴隷たちに殺されてしまう。そのアニーが150年経った今でも、ホワイティッチという幽霊となって現れるという。館内を案内してくれた若くて健康そうな女性ガイドは、最後に屋外にあるアニーの墓まで私たちを連れて行き、その物語の歌を歌ってくれた。伝説に過ぎないというこの話、信じてしまいそうな雰囲気だった。

1時間ほどで見学を終え、待っていてもらったタクシーでダウンタウン近くまで戻ってきた。日差しはそれほど強くないのに、湿気が多く蒸し暑い。通りに面した店でひと休み。渴いたのどにビールが旨い。ジャマイカで最もポピュラーな“レッド・ストライプ”という軽めのビールだ。このあたりが一番の繁華街のようだ。バスも走っているが、初めての旅行者には利用できない。そこからビーチ近くまでまたタクシーで移動して昼食。レストランはそのまま海に通じていて、更衣室やシャワーも設備されていた。水着を持ってきていた3人は海に入った。「せっかくカリブ海まで来て泳がないの？もったいな〜い！」と言われたが、私の持っている地味な競泳用水着は、ここではむしろ目立ってしまうだろう。結局私はこの旅の105日間、水着を着る機会はなく、海にも船のプールにも入らなかった。

モンテゴベイでの買い物は麻袋入りのブルーマウンテンのコーヒー豆とラム酒だった。帰船リミットは22時だったが、雨も降りだし、暗くなると治安はあまり良くないということだったので、夕食は船でということで、タクシーをひろって港に戻った。きょうの移動はすべてタクシーだったが、それでもオプショナルツアーの半額ぐらいだったと思う。

港のショッピングセンターで、大西洋で書き溜めておいた絵はがきや“わんりい”の原稿を投函した。ジャマイカの郵便事情が非常に悪いということを知ったのは、帰国して3週

間ほど経ってからだった。モンテゴベイで投函した絵はがきが6月になって自宅に届いた。その頃何人かの友人からも、4月の消印の絵はがきが2ヶ月遅れで届いたと電話をもらった。ジャマイカの旅行ガイドブックを本屋で立ち読みしてみると、ジャマイカでは、郵便はエアメールでも20日以上かかるから、急ぐならアメリカまで持って行っていただいたほうが良いとあった。事前に調べておかなかったのがいけなかったのだろう。

モンテゴベイ出港、23時。ラスパルマスから水先案内人として乗り込んでいた、健康アドバイザー(鍼灸師、太極拳師範)の大沢則夫さんやドキュメンタリー映像作家の森達也さんがここで下船された。大沢さんは、町田在住と知ってよけいに親しみを感じるのだが、飄々とした、それでいてユーモアも解する人だ。大西洋上でのある朝、太極拳の途中で、「あっ、鯨だあ〜！」と誰かが叫んだ。その声にみんな一斉にその声の方向へ走った。もちろん私も…。この航海中初めて私は鯨を見た。ど近眼の私でも、潮を吹く鯨をはっきり見ることができた距離だった。鯨の姿が波に消えるまで見て太極拳の場所に戻ると、大沢さんは「鯨だからといって目くら立てたりはしません。さあ、やりましょう。」と何事もなかったかのように続行した。彼の講座で、「アメージング・グレイス」の曲に合わせた24式太極拳と剣を使っての太極拳を見た。優雅な動きと対照的なすばやい剣の動き、どちらも美しかった。彼は綱引きの公式審判員でもあるという。

森達也さんの講座では、ドキュメンタリー映画、「A」と[A2]を見た。これは、地下鉄サリン事件後、オウムバッシングが続く中、あえてオウムの「中」から「外」を映しだし、ひとりの信者とその施設内部に視点を置きながら、当時の社会とオウムの双方を追ったドキュメンタリー映画だ。全体像を多面的でなくある視点から一方的に捉えて報道するのがメディアであると彼は言う。彼の住んでいる松戸の市役所前の看板に「人権はみなが持つもの守るもの」というのがあり、そのすぐ隣には「オウム信者に住民票登録はお断り」というのがあったそうだ。これを矛盾と思わずマヒしてしまっている人間が恐い、と彼は言う。また興味深かったのは、「放送禁止歌」の映像だった。「竹田の子守唄」や「イムジン川」はかつて放送禁止歌だった。そうしたの誰？その理由は？ピンクレディの「UFO」はイントロにモールス信号のSOSが入っていて放送禁止になりかけたのを、その部分を削除してOKになったという。これは本にもなっているのでぜひ読んでみたい。

棧橋に立つ彼らの姿が豆粒のようになって見えなくなった後も、紙テープの切れ端を持ったまま、モンテゴベイの街の灯が見えなくなるまでデッキにいた。久しぶりに陸上を歩きまわりいつもより体力を使っているはずなのに、まだ自分のキャビンに戻る気にならなくて、Kさんと「波へい」で飲んでしまった。彼女は毎日私の3倍くらい講座に参加し、朝から夜まで動き回っている。うらやましいくらい元気である。

3日後はいよいよパナマ運河通過だ。

「図書館はもうできたの？」と、よく尋ねられるのですが、いえいえ、まだまだ・・・これからです。

いよいよ10月末には長期でラオス入りをするつもりです。と言いましても、8月も丸々ラオスにおりました。

8月は安井のみで行ったのですが、この滞在で、図書館の建設に対しての、県、郡、村、全部の許可が取れました。本当にホッとしました。村に行ってみると、建設予定地にあったブタ小屋はすでに移動してあり、ありがたいなあ、と思いました。前回3月に建てた竹のドームはすでに壊れていましたが・・・「つい最近まであったよ。雨がひどくなってからとうとうつぶれてしまったけど・・・子どもたちが遊んで行ったかと思うと、馬や牛なんかもやってきてね、みんながドタンバタン遊んでいたよ」ということでした。

村ではトウモロコシ畑が水に浸かったとのことで、子どもたちと一緒にトウモロコシをもぎに行ったとき、腐って倒れたトウモロコシをたくさん見ました。10月、雨季が明けたいよいよ始まります。(2005年10月)

## ▶ 日本での活動報告

(ラオス山の子ども基金会報からの抜粋)

### 町田で刺繍絵本展

5月23日から、東京、町田市のぱるるプラザで、以前タイの難民キャンプでの子ども図書館活動の中で、モンの子どもたちが刺繍で作った絵本を展示しました。これは、町田の市民サークル‘わんりい’の皆様が企画し、全面的にご協力くださり実現したものです。約50点の刺繍の原画である刺繍の布などを展示、また、山の子ども文庫基金の活動も紹介しました。多くの人々がとても熱心に見て、モンのお話の世界を楽しんでくださいました。

### 製本作業

上記絵本展の準備として、刺繍の原画をデジカメで撮って印刷したものを製本しました。展示の際、刺繍絵本の現物に触れてもらうわけには行かないので、プリントアウトしたものを製本して、それをめくって見られるようにしました。製本作業は、‘わんりい’の田井さんに教えてもらいながら5人で製本しました。出来上がってみると本当に素敵な絵本となりました。展示会の折展示しましたが、山の図書館が出来上がったなら入れる予定でラオスにすでに持って行きました。

また、7月19日と26日の二日間、福音館書店の和田信裕さんのご指導で、再び製本作業をしました。仕事や学校の後、8人が集まって作業、刺繍で作った実物とは違いますが、同じくらい素敵な絵本ができました。

モンの村の図書館に、同じモンの子どもたちが作った

モン語のお話絵本をどうしても入れたい!というのが私の願いですが、刺繍の布絵本のオリジナルを持って行くわけにはいかず、そこで、カメラマンのつちだ耕平さんがボランティアで、仕事の合間合間に、1枚1枚撮影してくれているのです。これをデータで貰い、家のプリンターでプリントアウトしては、手作業で製本しています。刺繍絵本は布で作ったたった1冊ずつの手作り絵本ですが、これもまた、1冊ずつ全部違う手作り絵本です。こんな贅沢な絵本が入る山のと所管なんて、他にはないでしょうね。将来、村でも製本作業ができるようになればいいな・・・と思っています。

### ホームページを立ち上げる

やっとホームページを作りました。まだ構築中のページも多いですが、なるべく現状を丸のままお伝えしていきたいと思っています。

<http://www.geocities.jp/pajhnbky>

### 【屁っこき嫁の話】

夕方、リー、トン、ガオジェ、メドンのきょうだいの家を訪ねると、お父さんお母さんも畑から戻って、一家で一息入れているところだった。「さっきもいで来たんだよ」というトウモロコシを囲炉裏端で焼いている。焼き上がると、「パヌン(安井のモン名)、ノオノオ(食べる食べる)」とくれる。お母さんは「じきにサツマイモが煮えるから食べておいき」と、鍋いっぱいサツマイモを火にかけている。

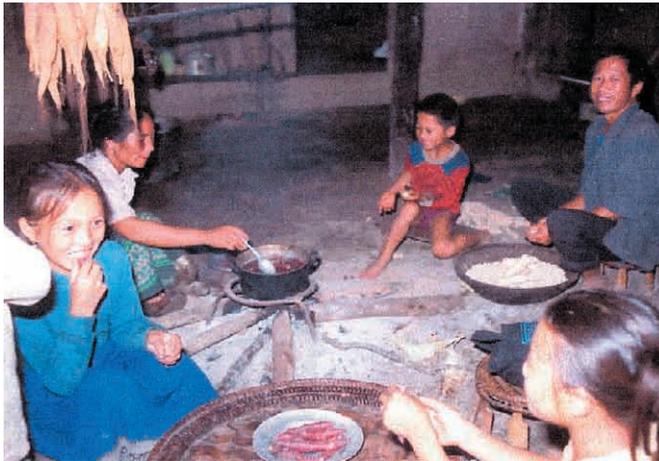
「サツマイモ食べ過ぎると、チョッポー(おならが出るよ)」とお父さんが言い、みんなで大笑いになった。「チョッポー(おなら)、チュッチューペー(臭い臭い)」。みんな鍋いっぱいのサツマイモがゆだるのを待っていて、「その大きいのは私のだよ」「ぼくのだよ」と先を争って食べている。甘くておいしい。

お母さんは、「おならっていえばね、こんな話があるよ」と、屁っこき嫁の話をした。以前読んだ日本のお話とほとんど同じ。どうして、同じ話が日本とラオスの山奥で語り継がれているのだろう。

ある家に嫁がきた。嫁はいい嫁だったけれど、次第に顔色も黄色く元気がなくなってきた。心配した姑に「いったいおまえどうしたの?」と言われ、「おならを我慢しているんです。わたしのおならはすごいから」と嫁。姑に「そんな我慢しないでいいから、一発おやり」と何度も言われ、嫁はおならをする。あんまりそのおならがすごいので、姑は大笑いをして死んでしまった。嫁は家に帰ることにしたが、貧しくて故郷に持っていくお土産がない。しばらく行

くと布を行商している中国人が来た。その中国人は、嫁のおならで母さんが死んでしまった話を信じない。それなら試しにこの帽子にやってみろ・・・と言われて、嫁は中国人の帽子をお尻につけて、一発ブー。帽子はふっとび、中国人は大笑いして死んでしまった。嫁は布を手に入れて、故郷のおっかさんと一緒に幸せに暮らしましたとき・・・というお話。

みんなでお芋をほおぼりながら、お母さんが語る屁っこき嫁さんのお話を聞く。「屁こくなよ」なんて言ってくすくす笑う。なんだか嬉しい、あったかい時間。



なかなか本に触れる機会のないラオスの山の子どもたちにとって、「図書館」や「文庫」は馴染みのないものですが、これからの子どもたちが、本のお話の世界の楽しさを知ること、未知の、より広い世界への扉を開け、心の世界を広げていくことが出来る場所、自分たちの民族独自のお話に改めて出会っていくことで、自分たちのことを見つめていくことが出来る場所、として「山の子ども文庫」を作りたい。



年会費：一口2000円（年数回活動報告の送付）

郵便局振替口座：ラオス山の子ども文庫基金

00160-6-482100

<http://www.geocities.jp/pajhnbuky>

▶「ラオス山の子ども文庫基金 支援コンサートが決まりました。ラオス・モン族の刺繍小物の販売もあります。皆様のお出掛けをお待ちしています。（詳細：'わんりい'掲示板）

## 中国を読む⑦

### 僕の見た『大日本帝国』

西牟田靖著 情報センター出版



先々月の小欄で「ラオスすてきな笑顔」を紹介するまで、私はラオスという国を意識したことがなかった。日本軍が進攻したにもかかわらず、だ。日本人である私が、まったく知らなかった事実、それはちょっとしたショックだった。

同じようなショックをきちんと受けとめたライターがいた。私と同じ1970年代生まれ。彼はサハリンの地で偶然、鳥居に遭遇する。日本固有のものが外国にあった衝撃が、日本の元植民地を回る旅へと駆り立てた。サハリン、台湾、韓国、北朝鮮、中国、ミクロネシアへ「日本の足跡」を辿ったルポルタージュ。

サハリンになぜ鳥居が建っていたのか？ 答えは簡単。日本の統治時代に、日本人の心の拠所として、そこに神社があったから。そして、諸事情により生

きながらえた。あの時代、アジア各地でも鳥居やモニュメント、建造物、鉄道が建設された。それらは現在も形を留めているものもあれば、破壊されたものも多い。

中国や韓国の反日活動を見ていると、植民地とされた人たちは総じて日本嫌いだろうという印象がある。けれども、一概に言えないことを西牟田氏の旅は教えてくれる。たとえば台湾やミクロネシアの島々に対して、日本は技術を教え、産業を育て、設備を整えた。その側面から未だに親日の国もある。そこで残る日本の建造物は、地元の人たちの好意の表れでもある。反対に、中国や韓国の史跡からは切々とした恨みが伝わってくる。中国では記念碑が今も「日本が中国を侵略した罪の証拠」として残っている。

残されたのは物だけではない。戦後の混乱のなか、帰国できなかった日系人や中国残留孤児たちも大勢いる。深い傷跡を残したまま、戦後は60年を迎えた。「過去に拘泥する必要はないが、過去を知る必要はある。きっと、未来だってその先にしかない」と著者は語る。「現在」に続く「未来」のために、私たちが知らなければならぬことは多い。（真中智子）

## 講演会「あなたの知らないアフリカの事実—その過去・現在・未来から考える」

### 要約2 アフリカの現在

講師：ガスパレィミグィキルス（ケニア出身）（アフリカンコネクション）

先日イギリスのブレア首相を中心に「アフリカの貧困の問題に真剣に取りくもう。そして貧困を解消しよう」という動きがありました。世界の首脳が集まり、また周辺では有名アーティストがチャリティーで番組に出演し、募金を募る大々的な取り組み様でした。連日の会議、イベントの様子はテレビでも放映されました。そこで、話し合われた主な3つの議題。

1つ目は、アフリカの累積債務を帳消しにしようという提案。2つ目は、エイズ対策への援助を増やそうというもの。私は、3番目の最終議題の行く末を見守っていました。それこそが、アフリカを貧困から救う最も効果的な解決策だと信じていたからです。それは、貿易不均衡を撤廃しようというものです。しかし、その議題についてマスコミが伝えたことはありませんでした。つまり、話しあわれなかったのだと考えることができます。先進国は本当は、アフリカの問題を解決したくないのだと実感しました。それは、自分たちの首を絞めることになるからです。世界の経済システムはアフリカを含め途上国が発展しにくいルールになっています。その理由を問題別に見てみましょう。

#### ① 貿易不均衡の問題

アフリカは農作物、原材料の供給源として位置づけ、低下価格でそれらを輸入し、製品等を高い値段で輸入するような関税などの枠組みを世界銀行・IMFなどによって義務付けられています。アフリカ国内の貿易に関しても、22%もの関税がかけられていて、アフリカ国内の貿易も活発化し過ぎないように決められています。しかしながら、ヨーロッパからの輸入に対する関税は12%でしかありません。そうして、輸入品のほうが、国内品よりも安く国内で売られているといった事実が出来上がるのです。また、先進国の農場と違い、政府より補助金が出ないため国際競争力がありません。例えば、EUの牛は一頭あたり2ドルの補助を受けています。しかしアフリカ人の45%以上が1日1ドル以下で生活していることを考えると、EUにいる牛の方がアフリカの人間よりも恵まれているのではないかとさえ思えてきます。

私の父は、コーヒー農園をしていました。どうして世界でも有数の品質を持ち、高値をつけているはずのコーヒーによって私たち子供たちを満足に育てられない状況においこまれるのだろうか？と疑問に思います。東京やニューヨークで飲まれているコーヒー1杯の価格は、信じられないほど高価にもかかわらず、ケニアのコーヒー農家

が得る収入はわずかで、価格も安定していません。しかしながら、ケニアでは政府により輸出用のコーヒーの木を切ることは許されておらず、他の作物を植えたくても植えられない制約があります。一生懸命働いて、家族が貧困であるという事実。原材料の供給先としての位置づけは、貿易によって富を得る権利がないといった形を変えた、そして過去のような奴隷貿易や植民地支配とは違った語られることのない搾取、支配としてもっと罪深いことであると私は思っています。その事実を多くの人に知ってもらいたい。アフリカ諸国は政治的な独立は果たしましたが、経済的には独立を果たしていないということ。

#### ② 食料問題

元来アフリカには飢餓は存在していませんでした。しかし、有名なエチオピアやニジェールでの飢餓はどうしておこったのだろうか？早魘があったのも事実だが、多国籍企業による農場支配が挙げられると思う。例えば、ブルックボンドやデルモンテといった多国籍企業は、アフリカ人の土地（肥沃なところのみ）を奪い、輸出用の作物を育てさせる。そして、アフリカ人を少ない賃金で雇い、彼らは賃金労働者となって食べ物を買うようになる。例えばケニアでは、輸出用の花の栽培がさかんであるが、もともとは食べるための作物用の畑であった土地である。そして、ケニア人は一体その花を必要としているのだろうか？すべては、安い労働力と肥沃な土地からくる、安い原材料の供給源としての位置づけです。

実例として、カナダがタンザニアで行ったことを挙げよう。彼らは、タンザニア人が植えていた主食であるとうもろこし、豆、キャッサバの代わりに輸出用の小麦の生産をするよう命じた。カナダ製の重機や化学肥料が持ちこまれ、安く小麦を生産し輸出させる体制を作った。反抗するものは、暴力、投獄、死刑が待っていました。

#### ③ 天然資源の問題

世界は、アフリカの天然資源なしでは生きていけないのは自明のことです。世界の50%以上の天然資源がアフリカに存在していることと、世界の難民の50%以上がアフリカにいるというこの2つの事実を私は偶然のこととは思いません。アフリカの天然資源を輸入することなしに世界の裕福な国の経済や人々の生活は成り立ちません。希少な資源を奪い合うための戦争が作為的に行われているという事実。そして、戦争を逃れた難民たちは、家を奪われた人々のことではなく、希望を奪われた人々

あると私は思う。世界のマスメディアは、飢えた難民の子供の写真を世界に流す。世界の人々は、感情的に受け止め、募金や援助を始める。しかしそもそもどうして、戦争がおき、難民がでたのか、その理由を自分たちの生活がアフリカの資源の上に成り立っていることと結び付けて考えることは少ないのです。

例えば、ダイヤモンド、ウラン、石油等の希少資源をめぐる戦争は後を絶えない。また、スーダン、シエラレオネ、アンゴラといった国々では、少年に麻薬を与え武器を持たせ戦争をさせる「少年兵」も問題も出てきている。私は、願う。もし神様がもう一度天地を創造されるとしたら、資源のないアフリカを創られることを。

#### ④ 医療問題

世界銀行やIMFが行った構造調整プログラムは、マクロ経済の安定を図る目的としてアフリカ諸国にも適用されたが、それは医療、教育や福祉等の社会サービスへの国の予算を削減することとなった。結果が以下の数字です。

	アメリカ合衆国	マリ
1歳までに死亡する子供の割合	7/1000人	125/1000人
出産時に死亡する母親の割合	1/2500人	1/10人
家族計画を利用している割合	71%	6%

現在のアフリカは、医者や看護婦、教師等の専門職の数は足りない。しかし、専門職の教育を受けているアフリカ人がいない訳ではない。彼らは、予算が少なく給料が安いアフリカで働くよりも、先進国で働くことを望むことが多いのです。これは、「頭脳流失」問題として深刻です。例えば、アメリカのカリフォルニアにいるガーナ人医師の数は、ガーナ全体にいる医師の数より多いという事実。

また、エイズの問題も重要である。エイズの恐ろしいところは、本人だけではなくその家族、子孫にわたり影響が続くという点です。また特効薬をめぐる問題でも、多国籍企業間の利権問題が絶えません。家族すべてが死亡し、子供だけが残されるエイズ孤児の問題も大きい。

#### ⑤ 教育問題

教育は、アフリカ人にとって高価なものです。その重要性がわかっても貧困のため学校に行けないことが多い。また、伝統教育との摩擦、女子の教育に対する偏見、エイズによる悪影響等も考えられる。中でも、子供をプランテーションで働かせる「幼児労働」の事実がガーナのカカオ農場や、いろいろな所で報告されています。日本で売られているガーナチョコレート原料となるカカオはガーナの幼児たちの手で収穫されています。問題は、子供たち

が就学の機会を失い、少ない賃金で重労働をしいられているという事実です。

#### ⑥ 政府の問題

先進国に経済的に支えられたアフリカ指導者たちの存在。彼らは、汚職にまみれ、援助金を自分の口座に入れることもある。アフリカ一般市民とかけ離れた華やかな生活。ヨーロッパに別荘を持ち、彼らの子供は先進国の学校に留学している。この事実を無視しては、効果的な援助は期待できないと思います。

#### ⑦ スラムの問題

アフリカ全土におけるスラムの出現と成長は目まぐるしい。仕事を求め農村部での農業を中心とした伝統的な生活をやめ、都市部での賃金をもらって働く近代化したライフスタイルの増加。しかし失業率は高く、スラムを拠点とした貧困生活を強いられている人々が多い。スラムは、ひとつの町としての機能をもち、学校、教会、病院などがあるところもあるほど巨大化しています。

#### ⑧ インフラ整備の問題

大規模なインフラは、先進国のひも付き援助として整備されることが多い。高速道路、ダム建設等。しかし、それを施工する多国籍企業やゼネコンと途上国政府との癒着の温床をなっているという事実があります。それを証拠に建設後利用されていないものが多くあります。もともと地元民の求めたものではないからです。日本も以前、世界銀行から融資を受けて新幹線を建設しました。そのように、アフリカ人も自身でイニシアチブを取って、インフラを整備出来るようにしていきたいと願います。

#### ⑨ 累積債務問題

先進国からの援助金よりも多くの返済を続けている。実に国家予算の60%を債務の返済に充てている国もある。実際、融資の押し付けである面も否定できない。本当に、人々が望んでいるのであろうか？国際金融機関と癒着したアフリカ指導者たちとの利益の共有化ではないのだろうか。実際、1人1人のアフリカ人がこの融資からどんな、どれだけの利益を受けているのか？実際は融資の存在をも知らないことが多いのではないだろうか？

植民地からの独立後も一部を除いて、政治的にも経済的にも低迷を続けるアフリカ諸国。不の歴史として語られてきた奴隷貿易や植民地主義以上の試練がアフリカを包んでいる。グローバル化という名の下「富めるものはますます富み、貧しいものはますます貧しくなる」世界の経済や貿易のシステム。先進国に住む多くの人が気付けないアフリカの貧困の本当の理由を知ってもらいたいと思います。

8月18日講演会より：竹田悦子(アフリカンコネクション)

nián huā wēixiào  
松本杏花さんの俳句《拈花微笑》より

## 長江の悠久たるを秋楼に

chángjiāng gǔn gǔn liú  
長江滾滾流  
suì yuè yōu jiǔ yù zhuàngyóu  
歲月悠久欲壯游  
yú kuǎn kuǎn rù qiū lóu  
魚款寬入秋樓

季語：秋樓，秋。

奔腾不息的长江日日夜夜向东流，也不知经历了多少岁月，然而，江边的秋楼（当指黄鹤楼吧！）却记载了长江的悠久历史，因为自那楼台建成之日，便饱览江水的流泻，尽管是先有江，后有楼。

此句有登高观江怀古之感，从岸边山上的秋楼俯瞰，犹如穿越时空隧道，将具象的长江纳入了抽象的时空思惟之中。

♪ 笑顔が美しくなる ♪

## 「中国語で歌おう会」 会員募集中!

明るく楽しい中国人歌手・趙鳳英さんと歌いましょう!



11月の講座 10月18日(金)

19:00～20:45

麻生市民館・視聴覚室(新百合ヶ丘駅下車北口3分)

- 11月の練習曲:「又見炊煙」(日本の歌「里の秋」です)
- ◆12月は16日:「又見炊煙」の復習と「平安夜」(聖夜)

●指導:趙鳳英さん(中国四川省出身歌手)

体験参加(1500円)歓迎します。ご自由にご参加ください!!

なお、ご参加される方は録音機をお持ちください。

問合せは、'わりい'事務局へどうぞ

TEL/FAX: 042-734-5100

## 何媛媛来信 ⑱

## べんぱつ 《辮髪のお話》

hé yuányuán  
何媛媛

皆さんは、中国清代の歴史劇をご覧になった事があると思いますが、清代の男性の髪形は面白いなあと思いませんか？

清国は満族によって建国されましたが、満族の祖先は女真族なので、髪形も女真族の特徴を引き継いでいました。

女真族はアジア北方の狩猟民族で、一年中見渡す限りの森に住み、馬に乗って猛々しい野生動物たちと戦い、険しい山々を走り、狩猟生活をしていました。そのため、女真族の服装や、髪形はいずれも狩猟行動に便利するようにしていました。前髪が垂れて視線を遮るのは、馬上での行動では危ないので、頭の前半を剃って、後半部分だけを辮髪にしたのだそうです。

公元1645年、満族は北京を攻め落とし清国を興しました。その時、漢族の官民が髪を剃るか剃らないかということは、清国に帰服するのかしないのかという証(あかし)になりました。古くから、体と髪は父母からの贈り物で、大切にしなければいけないと思う漢民族にとって、頭を切られても髪は切らないと、命と血で清国の「剃頭令」に反抗しました。しかし結局は、清

国の200年あまりの歳月の間に、漢族も満族と同じように辮髪の髪型が定着しました。

歴史が工業時代を迎え、西洋人から嘲笑され、また、辮髪は衛生面からも、機械操作の面からも、古臭く不都合だと国民の多くの人々も気がつきました。古い法を破り、維新を行い、辮髪を切ることは、文明の象徴になりました。面白いことに、200年前の「剃頭令」の時と同じように、髪型の革命は大変な騒ぎを引き起こしました。

日本の歴史でも、武士たちは馬上の戦争に便利なよう、前髪を剃って、ちょんまげを結っていました。その後、明治維新を迎え、旧習打破と文明開化の証として「断髪令」が発令された折、髪革命も大変だったということです。中国と日本の似たような髪物語は興味深く面白く感じませんか。

何媛媛：本名、何向真。

山西省出身。山西大学で日本語及び日本文学を専攻し、卒業。来日して以来、地域の国際交流活動に力を入れ、古箏と中国語を教えています。町田市能ヶ谷町在住。

**ラオス国立人形劇場 初来日公演**  
**ラオスの森から精霊たちがやってくる**  
 - シリーズ アジアの人形芝居 parto 11 -

自然の素材が生き生きと語りだす、ちょっとおかしくて、  
 ちょっと不思議な世界

◆ **演目：『まぼろしの森』**  
 - チャンじいチャンばあのみた夢 -

● **東京公演：11月19日** 於：アサヒアートスクエア  
 (アサヒスーパードライホール4F) 東京都墨田区吾妻橋1-23-1  
 東京メトロ銀座線「浅草」駅より徒歩5分  
 都営地下鉄浅草線「浅草」駅より徒歩10分

▶ **開演：◇14:00 ◇18:30** (開場 各30分前)  
 ▶ **一般3500円 学生3000円** (当日売りは各プラス500円)

● **川崎公演：11月20日(日)** 於：川崎市国際交流センター  
 東横線「元住吉駅」より徒歩約10分 ☎044-435-7000

▶ **開演：14:00** (開場：13:30)  
 ▶ **一般3000円(当日3200円) 学生2500円(当日2700円)**

■ **主催(財)現代人形劇センター / 上演実行委員会**  
 ■ **お問合せ：☎044-777-2228 (財)現代人形劇センター**

**馬頭琴演奏会 心の軌跡**



'05年11月14日(月) 19:00開演(18:40開場)

於：**ルーテル市ヶ谷センターホール**

JR市ヶ谷駅徒歩 / 都営地下鉄新宿線A1出口…徒歩7分  
 東京メトロ有楽町線 / 南北線 市ヶ谷駅…徒歩2分

▶ **馬頭琴：大内雅彦** ▶ **琴：オチルホイグ・ムンクトグトホ**  
 (モンゴル国立馬頭琴交響楽団首席琴奏者)

**申込み&問合せ：03-3488-1294**  
<http://www.batoukin@uranus.dti.ne.jp>

**『ラオス山の子ども図書館基金』支援コンサート**

独唱：**オオタカ静流**  
 ゲスト：**程 農化**(二胡・高胡 演奏家)

■ **2006年1月7日(土) 13:30(開場12:30)**  
 ■ **於：池袋・東京芸術劇場小ホール1**

私たちは、子どもたちが絵本やおはなしを通して、未知の世界への扉を開き、心の世界を広げていくことができる場所、同時に、自分たち民族に伝えられてきた伝統やおはなしにあらためて出会うことができる場所、そんな子ども図書館を作りたいと思っています。(安井清子)

- **お楽しみコーナー：12:30より、ロビーでラオス・モン族の美しい刺繍小物などを販売します。**
- **前売り：一般4000円 小・中学生2000円 前売りのみ**
- **主催：Mother of Earth**
- **協賛：B4-Records / おおたか静流**
- **問合せ&予約：TEL/FAX 03-3706-7325(野口)**  
 E-mail [jediton@k7.dion.ne.jp](mailto:jediton@k7.dion.ne.jp)

◆◆◆ **絵本原画**で見る世界各地の生活 ◆◆◆

**夢色のパレットII・野間国際絵本原画コンクール入選作品**  
 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから

於：**国際子ども図書館3F「本のミュージアム」**  
 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49

TEL:03-3827-2053(代表) TEL:03-3827-2069(録音による案内)  
 FAX:03-3827-2043 E-mail:[webinfo@ndl.go.jp](mailto:webinfo@ndl.go.jp)

● **2005年10月1日～2006年1月15日**

9:30～17:00 祝日と月曜日、毎月第3水曜日、年末年始は休館日

財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)と共催で行うこの展示会では、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ地域の絵本画家の創作活動を奨励するために開催されてきた野間国際絵本原画コンクール入賞作品を、その国の絵本・児童書と併せて展示致します。

● **主催：国立国会図書館国際子ども図書館**  
 (財)ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)  
<http://www.accu.or.jp/jp/index.shtml>

**[2005夢広場へお誘い合せてお出掛けを!]**

「夢広場」は、町田周辺の、30を越す国際ボランティア団体の交流の場です。11月6日当日は、これらそれぞれの団体が支援・交流している国の民芸品や料理材料の店や、飲食の模擬店を出展します。また、仮設ステージでは民族舞踊や民族音楽の演奏などが上演されます。お出掛け頂ければ、きっと世界の国々が身近に感じられる楽しい一日になるでしょう。

**【舞台のスケジュール(変更することもあります)】**

11:00～南米音楽とスリランカ舞踊 / 11:30～馬頭琴演奏 / 12:00～手話ダンス / 13:00～フラダンス / 13:30～アフリカンパーカッション / 14:00～フラダンス / 14:30～ネパールダンス / 14:20～朝鮮学校の子どもの踊り / 15:00～インド古典楽器演奏 / 15:30～手話で歌おう!

2005夢広場と写真展会場・地図 ⇨

**2005夢広場と写真展「我ら地球人」会場の地図**

